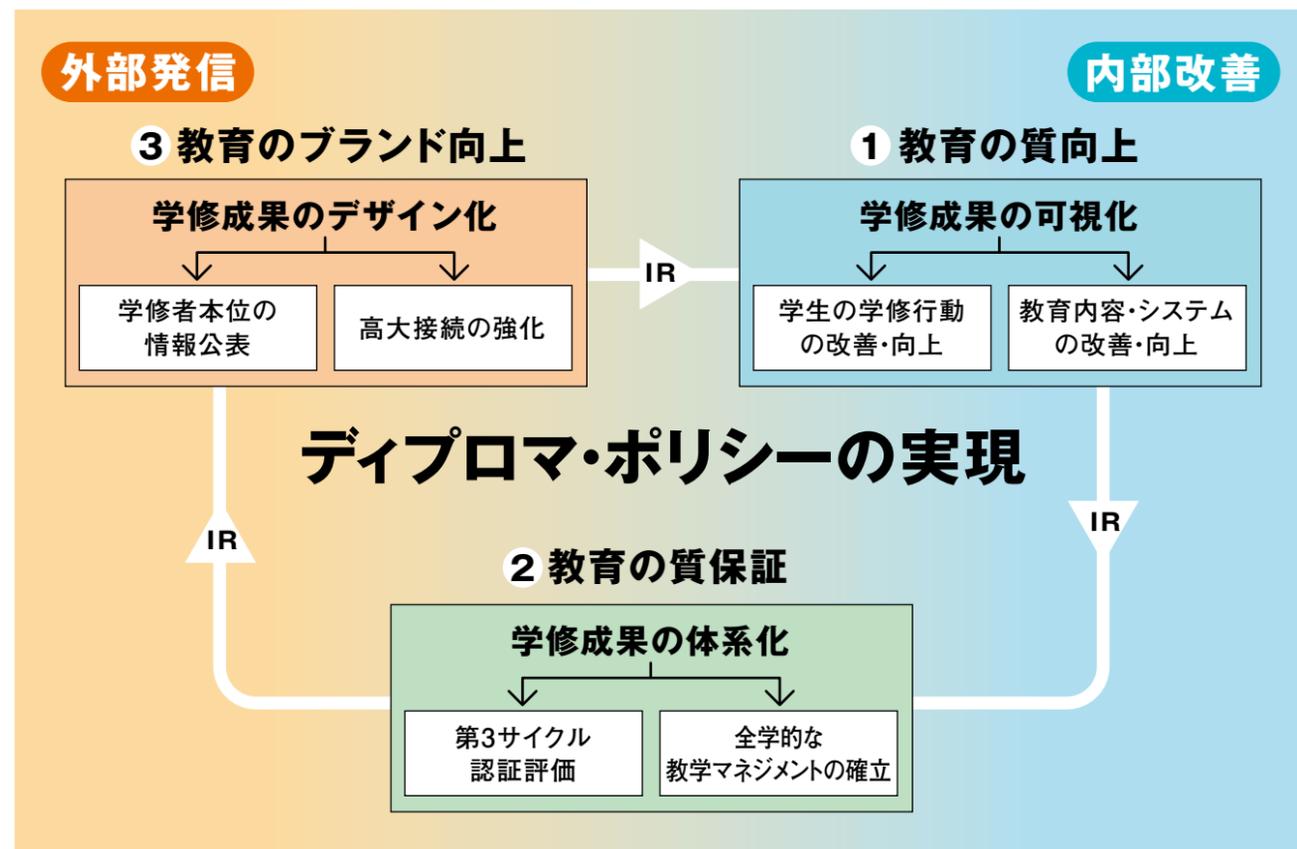
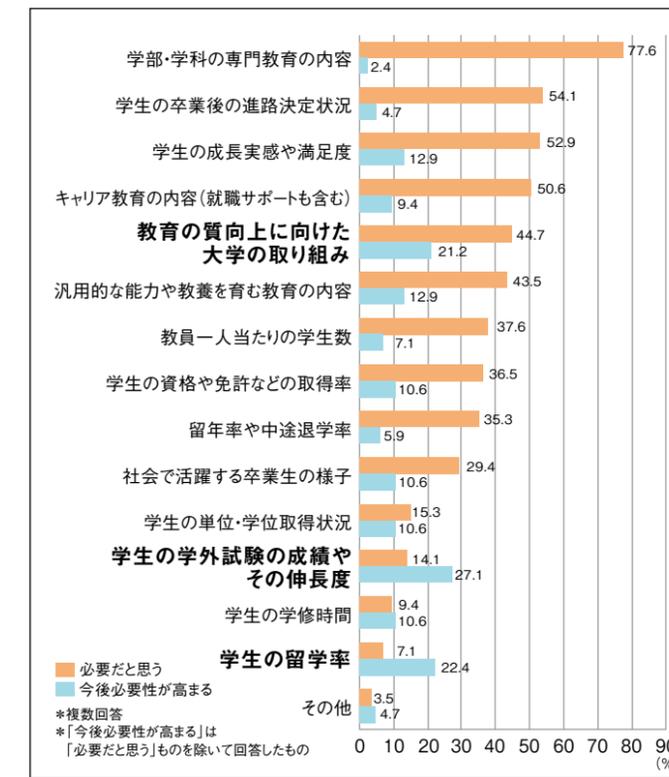


【図表7】全学で学修成果を活用して、ディプロマ・ポリシーの実現度を高める

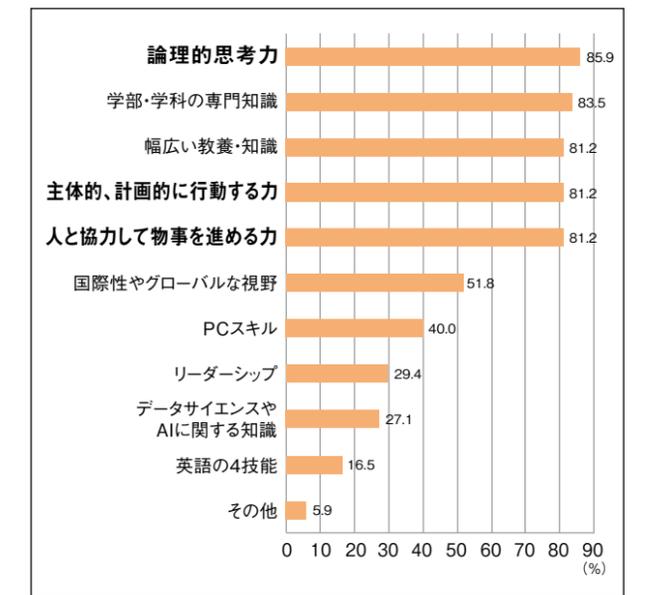


高校教員に聞いた大学の教育力調査結果

【図表6】今後は教育の質を示すエビデンスに注目
～進路指導を行ううえで必要な大学の教育に関する情報



【図表5】大学に汎用的能力の育成を期待
～大学生が卒業するまでに身に付けるべき能力・姿勢



*編集部調べ(2019年6月実施、高校教員85人対象 複数回答による各項目の選択率)

高校教員が大学に期待する学修成果の可視化とは

進路指導は受験指導からキャリア教育へ

さて、進路選択に大きな影響を与える高校教員は今、大学の何をみて高校生の進路指導にあたっていいのか。アンケート結果を基に考察していきます。

高校教員が期待する大学の教育を「大学生が卒業するまでに身に付けるべき能力・姿勢」という問いで聞いたところ【図表5】、専門知識や教養を抑えて、一番高かったのが、「論理的思考力」という結果でした。また、「主体性」や「協働性」の育成も、教養と同程度期待していることがわかります。これらは高校教育で育成している学力の3要素と重なっており、高校教員は高校で育成した力を大学でさらに発展させたいと考えていると言っています。

では、こうした期待にどう応えられる大学をどう探すのか。高校教員が進路指導で必要としている大学の教育情報を、「今必要」なもの、「今後必要性が高まる」ものに分けて聞いてみました【図表6】。

6。これによると今は、専門教育の内容が一番必要とされていますが、今後必要性が高まる情報としては、「学生の学外試験の成績やその伸長度」や、「教育の質向上に向けた取り組み」、「学生の留学率」などがめだつて高くなっています。つまり、教育の質に関する情報やそれを示すエビデンスに注目が集まっているのです。

実際、フリーアンサーでは、「大学をゴールにするのではなく、社会人育成としての指導が重要」「偏差値で当てはめるのではなく生徒の目標や能力と大学のマッチングを最大限考慮した進路指導が必要」「生きる力を伸ばす意味でのキャリア教育を充実させたい」との声が挙がっていました。

このように高校の進路指導は、その目的が、「志望大学への合格」から、「社会で活躍するために必要な力の育成」つまり、「受験指導」から「キャリア教育」へと変わりつつあると言えます。その意味で、「学修成果の可視化」とその「情報公表」は、大学にとって喫緊の課題なのです。

学修成果の活用によりディプロマ・ポリシーの実現度を高める

可視化した学修成果と教育の質を外部に発信

多くの大学では今、「学修成果の可視化」に取り組んでいます。高等教育の成果を可視化することは容易ではないため、可視化するだけで手いっぱいとなり、その先の活用になかなか進めない大学が多いようです。しかし、前述のように、今後教育の質に関する情報が学生募集に大きく影響を与えることを考えると、可視化した学修成果を教育改善だけでなく、さまざまな部署で活用すべきです。

全学での学修成果の活用については、【図表7】のようなサイクルで考えるとよいでしょう。

まずは、①教育の質向上です。ここでは学修成果を可視化し、学生の学修行動や、教育内容・システムの改善・向上に取り組むPDCAサイクルを確立します。現場でのこの活動が、全ての取り組みのベースです。学生の成長が見えることは、改善・向上に取り組む教職員にとって活力にもなります。

次に、②教育の質保証です。可視化した学修成果を全学の教育目標であるディプロマ・ポリシー(DP)の実現につながるように体系化します。それにより教員は全体の中の自分の役割が理解でき、授業改善の方向性がより明確になります。なお認証評価では、個々の教員の教育改善に向けた努力が大学として積み上がる形になっているかがチェックされます。

最後は、③教育のブランド向上です。可視化した体系化した学修成果を、学生を主語にした「成長ストーリー」にデザインし直して広報します。なぜなら、高校生や保護者、高校教員などが知りたいのは、「どういった入学者が、どういった教育を受けて、どう成長し、社会でどう活躍しているか」という学修者目線での情報だからです。また、自学の教育に期待する入学者が増えれば、教育の質向上と学生募集の好循環が期待できます。

これら3つをつなぐのがIRの役割です。このサイクルによりDPの実現度を高めることが、今後大学が生き残るための重要な戦略の鍵となるでしょう。